

いっぱい考え なんでも本気 いつでもチャレンジ 稲井つ子

籠峰山



着地点 元気のよいあいさつがかわされ、笑顔とキラキラ言葉にあふれる学校

学校HP

<http://www.city.ishinomaki.lg.jp/school/20301900/index.html>HP

学校だより

石巻市立稲井小学校

校長 高砂 宏之

(文責 教頭 石川裕一)

令和5年8月28日(月)

No.6

未来への架け橋（志を高く）

校長 高砂 宏之

私は1986（昭和61）年に初任として、女川町立女川第三小学校御前分校に赴任しました。分校児童は全員で30名弱、女川三小本校を入れても80名ほどの小さな学校でした。海のすぐそばの学校でした。この分校には5年間勤めましたが、とても素晴らしい学校でした。現在は女川小・中学校に統合され、存在しません。この学校に赴任した時に、当時の女川町の教育長先生に、「アラスカ物語」という本を紹介され、「地元出身の素晴らしい人が主人公だから読んでみるように。」と薦められました。主人公は石巻出身の安田恭輔（やすだきょうすけ）です。読んでみて感激しました。こんな素晴らしい人が石巻出身だったことに感動したので紹介します。

安田恭輔は1868（明治元）年に現在の石巻市の湊で代々医者の家系に生まれました。10歳の時に母を、次の年に父を病気で亡くしたので、15歳で三菱汽船の給仕として働き始めます。19歳から見習い船員として、アメリカ航路の貨物船に2年ほど乗ります。その後、アメリカのサンフランシスコ近郊の農場で、フランク安田と名前を変え働きます。1890（明治23）年にアメリカ沿岸警備船に乗り、アラスカ海岸沿いの密漁監視の仕事に就きました。ある時フランクは、船員たちの絶体絶命の危機を救う働きをしたものの、白人の人種差別に嫌気がさし、アラスカの極北の地ポイントバローという村で船を降りて暮らすことにしました。ポイントバローはクジラなどの海の動物を獲って暮らすイヌイト（エスキモー）と呼ばれる人たちが500人ほど住んでいる村でした。日本人がイヌイトの人たちと顔が似ていることから、フランクは仲良くしてもらいました。言葉を覚え、狩猟の腕を磨いたフランクは優秀な若者と認められ、ネビロと結婚します。この頃から、白人の密漁が原因で、クジラやアザラシなどの海の動物が獲れなくなりイヌイトは暮らしに困るようになりました。その上、「はしか」という伝染病が流行し、500人ほどの村人のうち100人以上が亡くなりました。はしかにたいする免疫がなかったためです。フランクの幼い娘も命を落としました。フランクは途方にくれました。そんなある日、カーターというアメリカ人が金（きん）を探しにポイントバローにやってきます。フランクはカーターの金探しに協力しながら、イヌイトの人たちが暮らしていける土地探しをしました。金探しの旅は3年が過ぎ、シャンダラー川の付近で幸運にも金の鉱脈を発見します（シャンダラー鉱山と命名）。フランクは約束通り大金をもらい、シャンダラー鉱山に近いユーコン川のほとりに200人の人が住める村を作ります。そこにポイントバローから800kmの道のりを200人を連れての大移住を行います（徒歩で）。途中2,000m級の山々を越える大変な旅でしたが、一人も欠けることなく移住することができました。フランクはこの新天地をビーバー村と名付けました（ビーバーがたくさん生息していたことから）。ビーバー村は鉱山から、毛皮の生産基地になり繁栄を続けます。1958（昭和33）年にフランク安田は日本に戻ることもなく、90歳で亡くなりました。フランク安田の業績をアメリカのマスコミは「ジャパニーズモーゼ」「アラスカのサンタクロース」と讃えました。アラスカの州議会もフランク安田の偉大な業績をたたえる表彰を行いました。しかし、日本国内ではその偉業を知る人は多くありませんでしたが、1974（昭和49）年に作家の新田次郎氏が「アラスカ物語」を発表すると、フランク安田は一躍ブームの人となり1974年の週刊チャンピオンに「ドカベン」や「ブラックジャック」と共に連載されました。1977（昭和52）年には映画化され、フランク安田の役は北大路欣也が演じ、その他にも穴戸錠や夏八木勲や丹波哲郎なども共演しています。

「アラスカ物語」を読み終わった私は、アラスカに行ってみたいなあという気持ちになりましたが、実際に行けるとは思いませんでした。この本を読んでから22年後の2008（平成20）年、突然アラスカに行くチャンスがやってきました。この年は、フランク安田が亡くなってからちょうど50年目に当たります。ビーバー村で記念祭（メモリアルポトラッチ）を開くことになりました。石巻市からは踊りや太鼓を奉納するための人たちが参加することになりました。この人たちに加えて、一般の人にも募集がありました。この機会を逃したら一生アラスカに行くチャンスは無いと思い、参加することになりました。全部で26名が石巻から参加することになりました。アラスカはご存じの人も多いと思いますが、アメリカ合衆国の49番目の州です。1つの州なのに面積は約150万km²で日本の4倍くらいの広さがあります。こんなに広いのに人口は約70万人くらいです。宮城県の人口の3分の1ほどです。行って初めて気づきましたが、国土が広いのに人口が少ないために、道路網は発達していません。移動の手段はほとんど飛行機です。タクシー代わりに小型の飛行機が使われます。自家用の飛行機を持っている人も多いです。2日目にビ



フランク安田（左）とカーター



ユーコン川のほとりのビーバー村 土煙は滑走路

ーバー村に飛行機で到着しましたが、驚きました。飛行場といっても建物は無く滑走路だけがあるばかりでした。しかもその滑走路は舗装されておらず、土です。離着陸するときには土煙が上がります。どうして舗装されていないのか聞いて納得。冬場はものすごく寒くなるので舗装すると滑走路が凍ってしまっで割れてしまうのだそうです。土だとそのようなことが起こらないのでもいいとのことでした。この時は8月なのでアラスカも真夏です。昼間は20度くらいまで気温が上がりますが半袖でも過ごせます。しかし、さすがアラスカ、真夏なのに夜になると（日が沈むと）気温が0度くらいまで下がります。防寒着なしでは耐えられません。しかし、北極圏に近いので、夏は日が長くなります。夜は11時頃まで明るく、また、朝は5時頃には明るくなります。夜がとても短いのです。ビーバー村には宿泊施設はありませんでした。ビーバー村の学校（クルイックシャンスクール）の教室に泊めていただきました。記念祭は2日間にわたって行われ、1日目はビーバー村の方々に歓迎していただきました。ムース（ヘラジカ）の料理なども出ました。初めての味でした。2日目は日本から行った人たちの踊りや太鼓や歌の披露でした。日本の文化について知っていただく良い機会となりました。3日目の午前中にフランク安田と奥さんのネビロの墓（火葬ではなく土葬でした）にお参りして記念祭は終了となりました。ビーバー村で楽しみにしていたことのもう一つはオーロラを見ることでした。1日目は曇っていて見られませんでした。2日目は曇っていて見られないかなと思っていましたが、途中から見る事ができました（写真を参照ください）。後で聞くと、1年間365日のうち、大体240日くらいはオーロラが見られるそうです。大変神秘的でした。



ビーバー村で見たオーロラ

アラスカから帰ってきてから、フランク安田の偉業を広く知らせるために、「フランク安田友の会」が結成されました。アラスカに行った人々を中心に、報告会を開いたり、日和山に記念碑を立てたり、様々な活動を行っており現在も続いています（私も会員の一人です）。石巻市の複合文化施設「まきあーとテラス」にも、フランク安田の偉業を紹介する展示物が置いてあります。

平成24年に宮城県教育委員会で「みやぎの先人集 未来への架け橋」を作成することになりました。江戸時代や明治時代に活躍した宮城県にゆかりのある人たち30人の生き方をまとめた冊子で、宮城県で進めている志教育の目玉となるものです。石巻市からは、川村孫兵衛（北上川を改修した人）、内海五郎兵衛（北上川に内海橋をかけた人）、フランク安田の3人が選ばれました。私は、石巻市の小学校の社会科の副読本「私たちの石巻」の編集委員をしていたことがあった関係で、みやぎの先人集の編集委員を務めることになりました。3人のうちの誰の原稿を担当するか、となった時には、もちろんフランク安田を選びました。（内海五郎兵衛の執筆を担当したのは、稲井中の佐藤修二校長先生です。）1年がかりで執筆や校正作業（10回くらい書き直しました）を終え、平成25年3月に宮城県内のすべての小学校の、5・6年生を対象に配布されました（学校に保管）。この冊子が出来上がった後も、冊子を読まなくても偉人について知ることができるように、宮城県教育委員会では「さとう宗幸さん」「杜けあきさん」「山寺宏一さん」ら宮城県出身の人に先人集を朗読してもらいDVDを作成しました。なんと、フランク安田については山寺宏一さんが朗読しています。この映像は、現在、YouTubeにもアップされており、「みやぎの先人集」と入力すると見ることができます。ぜひ、みやぎの先人について、見ていただければと思います。

ライフネット生命を創業し、現在、立命館アジア太平洋大学（APU）の学長をしている出口治明（でぐちはるあき）氏は著書の中で、「人間の考えは『人・本・旅』の累積が形作ります。」と述べています。大いに共感できます。私も、思い切ってアラスカに旅したことにより、様々な人々とのつながりができました。さらに、私の人生を大きく変える出来事もありました。それはビーバー村の学校での校歌の伴奏でした。体育館にはピアノは無く、伴奏は子供たちのギターとバイオリンでした。それが大変新鮮で、校歌の伴奏はピアノという固定観念を打ち砕いてくれました。それと同時に、ピアノは弾けないけれども、バイオリンは自分にも弾けるのではないかという妄想が膨らみました。アラスカから帰ってきてからしばらくたって、サルコヤに行きバイオリンを買いました。ずっとこれまで体育会系だった私が突然バイオリンを家に持って帰ったので、妻や息子は私が変になったのではないかと思ったそうです。どうせ3日で飽きるだろうと思ったそうです。その期待を裏切り、2年ほどカルチャーセンターのバイオリン教室に通い、その後無謀にも石巻市民オーケストラに入団してしまいました。それから11年ほどが経ちましたが、何とかオーケストラを続けています（名ばかりですが副団長も勤めています）。私の大学までの同級生は私がオーケストラでバイオリンを弾いているということを誰も信じません。人生とはわからないものです。

本日、長かった夏休みが終わり、元気に児童が学校に戻ってきました。2学期も1学期同様、様々な面でのご協力をお願いいたします。

9月の予定

1日(金)安全の日、街頭指導、発育測定(低学年)
5日(火)6年5時間授業、SC来校、縦割り活動
6日(水)修学旅行～7日(木)
8日(金)6年5時間授業
11日(月)5年課外授業、代表委員会
12日(火)プール納め、SC来校
13日(水)クラブ活動、集金袋配布
14日(木)集金日、PTA役員会
15日(金)街頭指導、祖父母参観日、集金日
18日(月)敬老の日

19日(火)SC来校
20日(水)音楽集会
21日(木)全校5時間授業、指導主事訪問、弁当日
22日(金)3年校外学習(仙台市科学館など)
23日(土)秋分の日
26日(火)5年松島宿泊活動～27
2年校外学習(石巻図書館)
28日(木)5年5時間授業、洪水想定避難訓練
29日(金)家庭教育学級